

ほとけの 混和会だより

令和七年二月

東 光 院
東 大 寺

第177号

【ブツダ】



おしゃかさま
この紙面の絵は、
病床より描かれた、
故有馬志保さんの
釈尊伝です。

「ほとけに成ろう」 3

仏教は二五〇〇年ほど前、インドの釈迦国の王子様の悟りから始まります。よってこの度はお釈迦様の生涯をごく略ではありますが説明させて頂きます。釈迦国の王様は「スッドダナ王」と言い、お后様は「マールヤ様」と言いました。マールヤ様は王子出産の為母国のコーリヤ国に里帰りされる途中、花の咲き誇る「ルンビニー」と言う花園でお休みに成られました。するとマールヤ様は急に産気づいて、王子様が誕生されました。

四月八日の出来事でした。その王子様の誕生を祝福して天から不思議な花びらや甘露の雨が降ったと伝えられています。

よってお釈迦様の誕生会を「花祭り」とか「灌仏会」と言つて花びらを散らしたり甘茶をかけて祝福します。

王子誕生の知らせを聞いた王様は大変喜ばれ、王子の名前を「ゴータマ・シッダールタ」と命名されました。

しかし、王子誕生の七日後、マールヤ夫人は、高熱によりお亡くなりになられてしまいました。産じよく熱かと思えます。

その後はマールヤ様の妹「マハー・プラジャパティ」に育てられて行きます。でも実のお母さんが居ない寂しさからか、色々と物思いにふける日々を送っておられました。

★人はなんの為に生きるのか。

★老いの苦しみから逃れる方法はないものか。

★迷いや病に苦しむ人々を如何に救つてあげたら良いのか
★人は必ず死を迎えなければ成らない、この現実を如何に受け止めたら良いのか。

などと私達が生きて行く上に於いて、避けることの出来ないこの苦しみ「生老病死」その他、

人々の様々な苦しみを如何に救つてあげたら良いのか、真の幸とはなんなのか、みんな幸せな日々を歩むにはどうしたらよいのか、など何時も思案にふけり瞑想の日々を送っておられました。しかしその当時も今と同じく自国の発展だけを望む国や、権力争いの紛争ばかり繰り広げられておりました。

釈迦国は、何時紛争に巻き込まれるのかと不安の日々を送つておられたのです。

よって、自国だけの幸と言うものはあり得ない。他国もみんな幸せを感じえる環境を築いて行かなければ眞の幸はあり得ないと思ひ、王子様は快樂に満たされた環境や王位継承の地位を捨てて出家されたのでした。実にシッダールタ王子二十九歳の時でした。



その時、王子として身に付けていた豪華な装身具を馬を引いてくれたチャンナ

に全て差し上げて、「馬を引いてくれてありがとう、これから真理に目覚め『ブツダ』と成るまで修行を続けるので、もうお城に帰っておくれ」と告げて、修行の山奥に入つて行かれました。

王子様は己の迷いや苦しみを招く要因である「自我」を滅する為大変な苦行を六年間も続けて、自ら己を死の寸前まで追い込んで行きました。

しかし苦行だけでは真理は得られないと感じた王子様は苦行と言う概念を捨てて修行の山を降りたのであります。そして、山のふもとで川で苦行の疲れを癒やそうとするのですが、衰弱仕切った王子様は川で溺れかかってしまいます。

そこに通りかかった村娘「スジャータ」に助けられ、牛乳で作った乳がゆの接待を受けて王子様



は体力を回復されたのであります。
持戒に続きます。
「コーヒーにスジャータ」



日本仏教に登場する仏様を毎号少しづつご紹介。今回は日本一危険な寺院を紹介します。

●三徳山三佛寺

昨年秋、仏教青年会「研究」にて「日本一危険な寺院」と呼ばれる鳥取県三徳山三佛寺三佛寺・通称「投入堂」へ行つて参りました。

三佛寺は標高約600mの山の中にあり、古刹で麓に本堂があり、その背後にそびえ立つ険しい山の中に複数のお堂が存在し、その内の一つが「投入堂」と呼ばれ、国宝に指定されております。三佛寺の開山時期は明確ではありませんが、西暦1000年頃役小角（えんのおづの）という修験道の僧侶が修行の道場を建てたことが始まりとされ、絶壁にお堂を法力で断崖絶壁に投げ入れたと言われている。未だ解明されておらず。100年天台宗の僧、慈覚大師円仁によって伽藍が建立され、阿弥陀・釈迦・大日三尊を安置した事から三佛寺と言われるようになった。

（体験レポート（老））

投入堂へ続く山道は行の場であり、山道は寺の本堂にて読経を三つ、の寺の僧侶より入山し、の寺の説明を受けました。

歴史有るこちらの本堂は神道と仏教が混じり、お仏習合の造りが残っており、本堂内に神様が祀る鏡と本尊両脇には神輿が安置され、お守り古くから人々に守られ、えまきた寺院で有る事が窺えました。

後、本堂裏手に移動し、入山手続になりました。先ずは適した靴か確認。山場に適さない場合は藁草履を購入する。とで入山許可がおり、方をと草鞋を購入。面白

そして修行場への入山には輪袈裟を借り、無ければなりません。「根を清浄」と書かれた六根を首に掛け、山と現世を渡り、境界となつた橋をとの境いざ危険な山修



行の山へと足を進め

続く

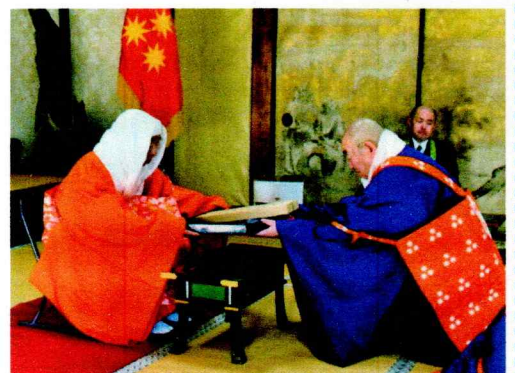


から山お言葉。山比叡山から。7年比叡山。和信紡心。令発繫と。

令和七年一月十日 比叡山延暦寺の年賀式に於いて、天台座主大樹猗下は平和な未来を願い、繫紡心と言うお言葉述べられました。

「繫紡心」とは、心を繋げて紡ぎ合うと言う事で、この繫紡心の心があれば、私達の社会は明るく照らされ、人を思いやる心と、感謝の心が人と人との繋ぎ、争いのない平和な未来が紡がれていきます。「ありがとう」の心を日々忘れずに過ごしましょう。と比叡山より発行されている新聞に記されておりました。殺伐とした孤独社会に追いつて、とても大切な言葉かと思ひます。私自身大事に努めて参りたいと存じます。

第259世天台座主に藤光賢猗下 2月1日にご上任



前天台座主大樹孝啓大僧正は百歳というご高齢の為九十三歳の藤光賢大僧正に職を譲られて、令和七年二月一日に志賀院門跡にて、第二百五十九世天台座主としての上任式が執り行われました。

藤光賢猗下は祖師のみ教え、『忘己利他』己を忘れて他を利する。この精神にて、「閉塞感に覆われた現代こそ、先ず我々宗教者が自戒し、釈尊より祖師方によつて連綿と受け継がれてまいりました人々の魂を救済するみ教え『道心』を持つて敷衍してまいらねば成りません」と呼びかけられました。猗下のお言葉、有り難く真摯に受け止めたいと存じます。